

「胸部外科」特集原稿募集

2025年4月号(78巻4号)において標記のテーマの特集を行いますので奮ってご応募ください。

テーマ

植込み型補助人工心臓治療の現状

2011年4月に心臓移植へのブリッジ(BTT)の適応で保険適用されて以来、2023年10月までに1,458例の患者へ1,699回の植込み型連続流式左室補助人工心臓(cf-LVAD)の装着が行われてきた。LVAD実施施設は2024年4月現在で44施設となっている。2021年5月からは永久植込み治療(destination therapy:DT)が保険適用となり、当初7施設であったDT-LVAD実施施設は2023年7月には19施設まで拡大された。2023年10月までのDTの装着は90例とまだ限定的である。DTでは、移植適応外である65歳以上の患者を中心に治療対象となることが想定され、日常治療を地域で完結することが求められる。そのためLVAD管理施設が増加し、2024年1月現在で28施設となった。

Japanese registry for Mechanically Assisted Circulatory Support (J-MACS)の報告によると、1,458例のBTT患者の予後は1年、2年、3年、4年で93%、90%、87%、81%であり、米国のInteragency Registry for Mechanically Assisted Circulatory Support (INTER-MACS)の報告より優れている。わが国の成人心臓移植の待機期間が5~6年と長期になっていることを考慮すると、慎重かつ丁寧な長期外来管理が必須となっている。

わが国では、国産のデバイスを含めてこれまでに6機種という世界で類をみない多機種のデバイスを使用しながらも、優れた装着成績を出すことに成功してきた。もっとも新しい完全磁気浮上のcf-LVADでは、欧米でも脳血管障害、ポンプ血栓症、消化管出血などのhemocompatibility-related adverse eventsが先代のデバイスより大きく減少し、さらには長期生命予後でも有意に優れていることが示されている。その一方で、ドライブライン感染症や右心不全はデバイスの進化によっても改善していないことが判明している。さらに、cf-LVAD患者の生活の質(QOL)を低下させる主要原因である再入院率はさほど減少していないことも、課題であることが指摘されている。

本特集では、完全磁気浮上のcf-LVADが主流となっているわが国のcf-LVADによるBTT治療によってどれくらい合併症が減少し、予後が改善したのかを欧米と比較して述べていただきたい。いまだ有効な解決の糸口がつかめない右心不全、遠隔期大動脈弁閉鎖不全症、ドライブライン感染症に対してどのように取り組むか、またDTを含めた今後の5年を超える治療をいかに安全に遂行していくのかなどのテーマについて、奮って投稿をお願いしたい。

『胸部外科』編集主幹 小野 稔、千田雅之

*

*

*

- **内容**：臨床と研究、臨床経験などテーマに沿ったもの
- **応募方法**：予定タイトル、著者名、施設名、ミニ抄録を400字詰原稿用紙1枚に収めて**2024年8月30日(金)**までにお送りください(**E-mailでも構いません**)。
編集委員会で採否を決めさせていただき、2024年9月末日までにご連絡いたします。
なお採用論文は下記のとおりご執筆をお願いいたします。
- **原稿枚数**：400字詰原稿用紙12枚以内(英文summaryを含む)、図表6枚以内
- **原稿締切日**：2024年11月29日(金)
- **掲載号**：『胸部外科』78巻4号(2025年4月号)

宛先：☎113-8410 東京都文京区本郷三丁目42-6 (株)南江堂『胸部外科』編集室
TEL：03-3811-7619 / FAX：03-3811-8660 / E-mail：pub-jt@nankodo.co.jp